



# 農の未来ネット

NO.32

新年号

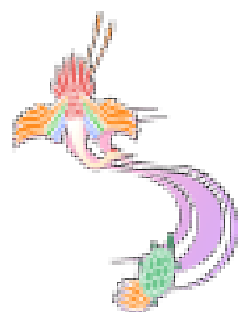
特定非営利活動（NPO）法人「農の未来ネット」

理事長：倉本器征（東京農工大学名誉教授）

発行責任者：田沼 繁（NPO法人農の未来ネット事務局：電話&FAX 042-313-3620）

編集長：西村正昭

<http://www.nou-mirai.org/index.html>



★★★★★  
新年の  
ご挨拶



「農の未来ネット」理事長

倉本 器征

（東京農工大学名誉教授）

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

新しい年が始まり、昨年3月11日の大震災から10ヶ月たちました。しかし、被災地の復旧・復興は進んでいません。その一方でTPP関係9カ国の会議が進み、日本はベトナムを皮切りに事前協議を進めています。

例外が認められない包括的協定であるTPPは食料供給、医療、金融、労働など日本経済全体に深刻な打撃を及ぼす危険があります。

それなのに、なぜTPP参加を急ぐのですし

ょうか。その理由を日本農業新聞の「無謀合意なき国策」（2011年10月26日付）で経済評論家の内橋克人さんは次のように述べています。「戦争、政治的異変、自然災害に見舞われ、人々が衝撃と恐怖に打ちのめされている隙に急進的な『改革』をやっけてのける。まさに『ショック・ドクトリン』ナオミ・クライン著・岩波書店だ」。例としてはイラク戦争、スマトラ沖地震、ハリケーン・カトリーナがそうだった、とのこと。

また、2012年1月3日付の日本農業新聞の「論説—『明日』への視座—」では、昨年11月にJA全中会長に会談を申し入れた日本経団連会長は「TPP参加のメリットあげながら『高いレベルの経済連携推進の必要性は震災でむしろ高まった』と言い放った。震災時こそ自由化に踏み切るチャンスとでも言うのか。（中略）経済界や一部の研究者が唱えるTPPを大震災の時こそ実施し被災地に輸入対抗の大規模モデル農業団地作るべきだとの論理は、日本版

『ショック・ドクトリン』ではないか」と述べています。このほかにも漁業権を市場開放する特区構想も出されています。

今は「だめなものだめ」という毅然とした態度でT P P参加と日本版ショック・ドクトリンをやめさせることに国民一人ひとりが立ち上がるべきだと思います。

## みらい体験農場 2012年計画

**「みらい体験農場」農場長  
一之瀬 今朝一副理事長  
(愛称おらっち)**

新年あけましておめでとうございます。  
農場長の一之瀬です。

みらい体験農場は、就農希望者が農業体験できる場に、また、会員や農作業体験希望者が気軽に農作業に参加できる場として、昨年、さいたま市西区に約25aの水田をお借りし、3月の耕耘、4月の種まき、5月の田植え、9月の稲刈り等を実施し、収穫物のコメを会員に配布をしてまいりました。

稲作栽培は、地主である細田さんにご指導いただき、また細田さんからは水田の水管理や農機具の提供など、全面的にご協力いただいたところです。

昨年の猛暑の中でも予定の収量が確保で

き、米作りに参加して充実感を味わった者の一人としては、できるだけ多くの方に農業を体験していただく仕組みを作り、農場の活用を広げていきたいと思っています。そこで、本年も引き続き、約25aの水田をお借りし、稲作りを行うこととしますが、当NPOとしては、一人でも多くの方が栽培に参加していただき、農業のすばらしさを体験してもらう内容にするため、現地での交流会(田植え、稲刈り)の実施や作業参加者が畑作物をお土産に持ち帰ることを計画したいと検討しています。また、大学生が農業体験できる場としても対応して行きたいと計画しています。

具体的には、稲作りは、コシヒカリ、彩のかがやき、ミルキークインの他、古代米を約2a手植えし、田植えの時には交流会も行いたいと考えています。また、水田に隣接している畑の一部をお借りし、手間がかからないさつまいもなどの畑作物を栽培してみたいとも考えています。

作物の生育・収穫を心待ちにし、いつでも田畑の作物に手をかけ、収穫物を味わう環境作りを作りたいと思います。

農地の借り上げ代や農機具の燃料費、種苗等の経費が必要なことから、みらい体験農場の運営は誰でもが参加できる「オーナー制」的な仕組みを視野に検討をしています。本年を実りの多い、みらい体験農場にするために、会員・支援者皆様のご意見、一層のご協力方をよろしくお願いいたします。

< 細田さんから一言 >

**NPO農の未来ネットの皆さん、あけましておめでございます。本年もよろしくお祈りします。**

**まずは、種柄の調整から始めますので、一緒にやみましょう。がんばってください。**



【写真】 田畑を提供してくれている細田さん

## 埼玉産直センター での奮闘記

当NPOが取り組んでいるアグリ・ボラバイト(協働援農)事業に全面的にご協力をいただいている農業生産法人埼玉産直センター(深谷市)の専務理事から、2年前に「農業にやりがいと意欲をもった青年を新規採用したいが、どなたかいないだろうか」との相談があり、当NPOが東京農業大学の関係者に照会したところ、内田孟哉さん(林学科)に白羽の矢が当たり、面接の結果センターへの就職が決まりました。現在、内田さんは埼玉産直センターで充実した日々を送ってられます。この度、内田さんに埼玉産直センターで

の奮闘手記を寄稿いただきました。

追記)内田さんにはお忙しいなか、日頃から当NPO活動にもご協力をいただいています。

(編集事務局)



**「絆」を大切に今日も元気!**

**農業生産法人埼玉産直センター  
生産部職員 内田孟哉さん**

一度も訪れたことの無かった深谷の大地に足を踏み込んでから丸二年が経とうとしています。一年間、東京から片道二時間かけて通っていた私も今ではすっかり深谷人。最初電車から降りた時の「ネギの香り」も今では全く気にならない所か、東京の実家に帰った時に「ネギの香り」が無いことに違和感を覚えるようになりました。

入社して最初に強く実感したのは「農業は天気との戦い」が大きい事です。入社した最初の四月から何年か振りの雪が降り、露地栽培の作物が被害を受けたり、台風でハウスが冠水してしまった農家もありました。最近の異常なまでの乾燥も、生産者だけでなく我々職員一同も「恵みの雨」を期待している現状です。「農業の現場は天候との戦い」という事を肌で実感し、今も戦っています。

普段の仕事についてですが、今ではやっと慣れてきた…?という感じです。入出荷作業で使うフォークリフトも入社して免許を取ってしばらくは、おっかないノロノロ

運転でしたが、やっと自分の動きたいように動かせるようになってきました。毎日、毎週の仕事である一日の入出荷状況の整



### 【写真】 ホークリフトで内田さん

理、生産者一人一人の一週間の出荷予定の確認、各取引先の出荷予定の整理といった事務的仕事も当初よりも間違い少なくできるようになったと思います。また、最近では自分の担当する部会や、取引先、産直センター発行の機関誌の編集も行うようになり、次第に重くなっていく責任と向き合いながらも日々奮闘しています。

最後に入社してから今も大切にしている事があります。それは「人と人との繋がりに」です。産直センターに入って最初に貰った自分の名札には名前の下に、「生産者と消費者の絆を守ります」と記されています。今年のキーワードにもなった「絆」。当センターは30年以上前から生産者と消費者との交流に重点を置き、消費者との野菜作り、収穫体験、交流会を活発に行っています。食品の安心・安全というのは「絆」や「繋がり」でより強固なものになるのだ

と思います。至らない点だらけで精進の日々が続きますが、産直の理念でもある「絆」を大切に今日も元気に仕事します！頑張るぞー！！



## 編集後記

1月中旬に二泊三日で群馬県嬭恋村にある日進館万座温泉ホテルへ療養に行って来ました。途中、長野原町の八ツ場(やんば)ダム建設現場近くを通りました。「オヤッ」とびっくり。一年ぶりでしたが、ダム建設工事が大々的に行われている様子を目の当たりにしたからです。民主党が2009年の総選挙で「税金のムダ使いを徹底的になくす」と公約に掲げて政権交代を果たしたことを思い出しました。一時は前原国交相(当時)が八ツ場ダム建設中止を表明しましたが、野田政権は建設再開を決め、2012年度予算案に本体工事再開の予算を盛り込みました。「建設中止」をマニフェストの第一番目に掲げていたのを忘れてしまったのでしょうか。建設現場を目にしながら、国民に約束した公約を投げ捨てた野田首相の顔が浮かんで来ました。療養にいく途中だということを忘れ、腹が立ってきました。自民政権とまったく変わらない。いや、それ以上に国民を足蹴にして暴走している野田政権。「ドジョウ」と自ら名乗り揚げた野田首相。水田にいるドジョウは、稲作づくりには大きな役割を果たしてくれますが、「野田ドジョウ」は農業を崩壊させるために地上で動き回っているとしか見えません。こんな「野田ドジョウ」は、国民の力で放り出したいものです。

(西村)

